

# 花の香り（春-1）

中村祥二（会長）

## はじめに

花の香りは姿と同様に多様である。地球上の土地それぞれの気候風土にあった植物が、その命の輝きの頂点で花を咲かせさまざまな香りを放っている。人はいつも花の快い香りを求め、愛でてきた。

それぞれの地域には長い歴史に育まれてきた独自の園芸文化があり、花についての考え方、感じ方、味わい方が異なっている。

どの科や属でも香りの強いものは原種に多い。自然の中で人類誕生の以前から、全く人の手を借りずに、自分の力だけでよい子孫を残し、進化し生き抜いてきた原種には、長時間眺めていても不思議と飽きのこない味わいと魅力を感じる。

私はどこでも花があれば背の届く限り花の香りを嗅ぐことにしている。難しいのは梢たかく咲く花、ハス、スイレン、それに怖そうな犬のいる家の玄関先の花々。ペン、メモ用紙、デジカメがあれば香りを記録できる。

○花の良い香りの判断基準を園芸的な視点から私見として述べておきたい。

香りがよいとは

- ・ 快いこと、上品であること、華やかなこと
- ・ 強さと広がりがあること
- ・ 嫌なニオイがない、いやな不快なニオイや濁りのないこと
- ・ 寝室、リビングルームに長くおいても快いこと
- ・ 身の回りに置いておいても飽きがこないこと

○リビングフラワーとカットフラワーの香りの違いについて

これから咲こうとする蕾、昆虫をいつでも迎え入れようとしている一番いい開花の時に茎を切られてしまうのは植物にとって驚きであり、大きなショックであるに違いない。カットフラワーが香りを変えるのは当然予想されることである。

リビングフラワーとカットフラワーの香りに違いについては米国の香料化学者 B. ムカジー によって詳細に研究されている。その詳細については述べないが、研究対象の全ての花について実際に嗅いだときの香りの良さと分析結果の両方でリビングフラワーの方が香りに優れていることが裏付けられている。

今回から季節毎に花の香りを3、4種類ずつ取り上げたいと思っている。1回目は4種類の春の花とした。

## 3 大花香の一つ スズラン

スズラン (*Convallaria majalis*) は春を告げる花である。園芸の世界ではスズランといえばドイツスズランを指す。園芸種にあるピンクや紅色の花を私はまだ見たことがない。庭のドイツスズランは成長が早く、春先に芽を出すと見る見るうち



スズラン (*Convallaria majalis*)

写真提供：杉原幹男

に大きくなる。じきに花芽が伸び、葉の丈ほどになって咲く。雨粒をはじく浅い緑の輝きのある葉も美しい。ドイツスズランは強健で、油断すると庭中に広がってしまうのが心配で、土に降ろすのを止め、9号の大鉢に植えてある。10年以上も植え替えていないが、病虫害はなく、少しの肥料で至極元気がよい。スズランの花からは香料は採らない。以前、思いがけず北朝鮮から送られてきたスズランの天然香料のサンプルをかいだことがある。香りは意外にも花を嗅いだときとは違って、溶剤抽出の香料バラに似ていて、名前を聞かなければ、香料バラの一種かと間違えそうになった。価格もバラに近く、小さな白い花を摘んで香りを集めるのは、いかに労力のいる仕事かと想像できた。香料の色は花とは反対のやや沈んだ赤色であった。白い花のジャスミンの香料がやはり赤色であることからしても不思議ではない。

庭で花が咲くのは5月1日頃で、フランスのスズラン祭りとの時期が丁度一致するのは面白い。

ヨーロッパの北国の人々にとって、スズランは春の訪れを告げる花であり、欧米ではこの花を幸福のシンボルとして花嫁が手に持つ習慣がある。スズランは聖母マリアの花とされ、清らかさの象徴である〈幸福の再来〉〈純潔〉〈甘美〉などの花言葉がある。

スズランの香りはジャスミン、バラとともに三大花香の一つである。ややグリーンを帯びた爽やかさの中にも、新鮮で、すっきりした甘さのある心地よい香りがし、スマレやライラック、クチナシの香りともよく調和するので、香水によく用いられる。スズランの香水の名品としてディオリッシモ（ディオール）がある。

## 香料にも使われた優れた香りのスイセン

30~40年前は天然香料のサンプル棚にジャスミンやローズと並んでスイセン、キズイセンのピンが並んでいた。最近では高級天然香料のなかには栽培する土地や人件費の高騰、香料価格の抑制、天然香料の香りを人工的の再現する技術の発達などにより生産を中止するものがふえている。残念

ながらスイセン、キズイセンの香料も見かけないようになった。時代の流れとはいえさみしいことである。

園芸学上12分類に大別されるスイセンのうち香りのあるもの、香りの良いものはどの種類なのだろう。これを知る一番良い方法は全てのスイセンが一斉に咲いている所で実際に香りを嗅いで調べてみるのが望ましい。日本のスイセンの三大自生地 - 伊豆下田の爪木崎、淡路島の南淡町、北陸の越前海岸では季節にそれぞれ数百万本のニホンズイセンが一面に咲くので有名だが、ここでは多くの種類が見られるのだろうか。

昨年3月下旬、200種類100万本のスイセンが花盛りを迎える時期を狙って、茨城県の国営ひたち海浜公園に出かけた。ボランティアの方の案内に加え、同行の園芸研究家の鳥居恒夫さんに細かく解説してもらいスイセンの種類を正確に知ることが出来た。

12分類のうち3分類の花に優れた香りが感じられた。



ニホンズイセン

(*Narcissus tazetta* var. *chinensis*)

### ①房咲きのスイセン

ニホンズイセン (*Narcissus tazetta* var. *chinensis*) は香りの良いものの代表である。透明感のある強く拡がりのあるヒヤシンス様の甘さがある。正月に花瓶に飾るとその香りからいかにも新しい年が来たことを感じる。ニホンズイセンの名をもつが地中海沿岸地域が原産でシルクロード

を通り中国を経て、平安時代に日本に渡来したスイセンである。

夜中にふと目覚めると水仙の香りがするのに気付いた。嬉しくなるような幸せな香りだ。眠りを妨げるような香りでもない。寝室に花は置かないようにしているが、お正月にスイセンをたまたま一輪さして置いたものだった。

### ②キズイセン (*Narcissus jonquilla* L.)

フランスで香料を採取していたのは原産地の野生の *Narcissus tazetta* L. である。

柑橘のさわやかさとコクのあるヒヤシンス様の甘さがある。インドールという成分が香りの拡がりを強めている。3種類のなかでは最も香りが強い。

フランスではキズイセンからも香料を採取していた。

### ③クチベニズイセン (*Narcissus poeticus* L.)

ラップ部分の副花冠の縁が紅色なのが名前の由来である。私が嗅いだ園芸種 ‘Actaea’ は上記の2種の①②とは違う系統の香りで、弱い緑茶様の特徴のある化粧品のイメージがある女らしい香りで、花の姿に相応しい香りなのが面白かった。

スイセンのなかで最も古く歴史に現れたのがクチベニズイセンで種小名の *poeticus* は詩人という意味であり、古代ギリシャの詩人たちがこの花を大いにうたった為である。

## 世界最大のランの香り

2006年正月からマスコミを賑わした話題の花がある。世界最大のランが国立博物館筑波実験植物園で咲いたというニュースだ。グラマトフィルム・スペキオスム (*Grammatophyllum speciosum*) というなじみのないランだ。強く甘い香りを放っていると報じられているが、具体的にどのような香りかは分からない。めったに咲かない花なので、嗅いでみたいという気持ちでいっぱいだった。12月から咲き始めていたと聞いたが、遅ればせながら植物園に電話で伺ってみると2月に入ってもまだ花が見られるという。

植物園の世界的なランの権威であり、このラン

の育ての親である遊川知久博士にお願いしたところ案内して頂けるという嬉しいお返事をいただき、つくばエクスプレスで出かけた。

東南アジア、ニューギニア、ソロモン諸島の低地の木に着生するランである。自生地でも開花は気まぐれで、数年に一度しか咲かないことがふつうという珍しいものである。花期は秋である。茎の長さが3メートル、よく育つと7メートルあまり、植物自体の重さは2トン近くになり、一株に10,000輪が咲いた記録もあるという。

温室の中は梅雨を思わせる蒸し暑さで冬の服装は似合わない。文献によると花茎は直立すると書かれているが、ここではそのあまりの長さのためにしなったり、下に湾曲したりしている。花は根元の方から順番に咲き上がってくる。12月に咲き始めたものは、すでに枯れているのに先端の方にはまだつぼみが付いている。

花をたくさん付けた長い花茎をそっと手元に引き下げると香りを嗅ぐことができる。このランは黄色に赤褐色の不規則な斑紋が入る直径10cmほどの花を咲かせる。長年いろいろな花の香りを嗅いでいると、花の姿と香りに何らかの関係がありそうに思えてくる。予想が当たることもある。写真の花の姿からはヒヤシンスにブルーティーノートと少しアルデハイドが混じった熱帯的な香りを一応予想しておいた。それにどんな香りかと考えていると楽しみも広がるからだ。しかし、今回は予想に反してスズランを中心にジャスミンが控え



グラマトフィルム・スペキオスム

(*Grammatophyllum speciosum*)

めにちりばめられているとても良い香りだった。香りを周りに広げる力はジャスミンにも含まれるインドールのためである。ほどよい甘さの調和のよい透明感のある香りはきれいで、香水の素材の一つとして使えるような高いレベルである。

遊川さんからは来年はまず咲かないし、次にいつ咲くのか分からないと伺った。一緒に研究をしている鈴木さんによると咲き始めのころの花はフレッシュな、もっとしっかりしたよい香りでしたとの由であった。ランもたくさんの花を咲かせ続けるとエネルギーを消費してくたびれてくるのだ。珍しい花の香りは知らせがあったときに、すぐに駆けつけなくてはいけないことを実感する。嗅ぎ時が大切である。

なお、グラマトフィルム・スペキオスムは今年で26回目を迎える世界らん展日本大賞にも展示された。

### ピラカンサの放つニオイの戦略



ピラカンサ

(*Pyracantha coccinea*)

花の香りの役割をよく理解するためには、香りのよい花だけでなく嫌なニオイの花も知っておくとよいと考えるようになった。私たちの身の回りの花に注意していると、そのような花をいくつか見かける。ピラカンサ(*Pyracantha coccinea*)はその一例である。わが家の玄関先にあるピラカンサは、春先に無数といってよいほどの小さな白い花をつける。朝、玄関先に新聞を取りに出ると、おかしいニオイがする。腐りかけた魚の干物が近く

に落ちているのではないかと、近所の猫がくわえてきて、そこに置き去りにしていたのではないかと、足元を見回すがそれらしきものはない。

私の背丈より少し上のところに、白い小さな花が群がって咲いている。顔を近づけてみるとかすかな青臭さが混じった干物ニオイがする。干物のニオイの正体はピラカンサだった。日が高くなり少し気温が高くなった10時頃、ピラカンサにはたくさん小さなハエが群がっていた。バラや柑橘類の花を交配するミツバチや甲虫と上手に役割分担をしているのだ。自然界の妙である。

花の季節が終わり、梅雨の始まるころには、浅い緑の小さな実が花の数ほどついている。干物のニオイに誘われたハエの目覚ましい働きの結果だ。紅葉の便りが聞かれるようになると、その実は赤みをまして美しい鮮紅色になる。12月の半ばを過ぎるころムクドリが来て、2日ほどでほとんどその実はなくなってしまふ。昨夏の酷暑の影響か、例年とは違って赤い実が無くなったのは1月も中旬ころだった。どんな味がするのか、5、6ミリの小さなナシ型の実を口に入れると、それは未熟のスモモの皮のような味がした。

### 参考資料

中村祥二：花の香りの復権 最新農業技術 花卉 vol. 1, 341-370, 2009

中村祥二：コスメチックからのメッセージ 日本化粧品工業会 No.154-189, 2000-2007